

平成 30 年度卒業式訓辞

卒業生の皆さん、本日は、誠におめでとうございます。いま、その凜とした姿はとても美しく、わたしは大きな喜びと幸せを感じています。また、この晴れの日を迎えるまで、その成長を傍らで見守ってこられたご家族の皆さまにも、日本体育大学を代表して、お祝いとともにこれまでの御支援に厚く御礼を申し上げます。

皆さんは、所定の教育課程を修了し、いよいよ社会に羽ばたいていくわけですが、卒業に際して、いま一度ここで、4 年前の入学の時を振り返ってみてください。あの時、それぞれが誓った想いや目標にどれだけ近づき、その時立てた計画はどれほど実践できたでしょうか。

わたしは、1975 年 4 月に、本学体育学部体育学科に入学しました。大学入学後の当面の目標として、まずは体操競技のナショナル選手に選ばれることを掲げました。世界選手権、オリンピック、いずれも国際試合に出場するためには、絶対条件だったからです。

1 年生の時、ナショナル選手にしか与えられないゼッケンを誇らしげに背中に着けている選手を見るたびに、自分がそうでないことをとても悔しく思う日々を過ごしていました。

2 年生になり、なんとかその第 1 目標に辿りつくことができました。全日本体操競技選手権大会で個人総合 6 位に入賞し、当時史上最年少で、ナショナルチーム入りを果たすことができたのです。「48」番のゼッケンがついたユニフォームに袖を通したとき、いよいよ世界レベルの扉を開いたのだ、という満足感と期待感から、新たな闘志が沸々と湧いてきたことを覚えています。

しかし、順調な時期は、そう長くは続きませんでした。3 年生になってまもなく、ユニバーシアードの国内予選直前に、つり輪の着地で左脚の腓骨を骨折をしてしまいました。担当医からは、「体操競技はもう 2 度とできないかもしれない」、とまで言われるほど、厳しい状況に追い込まれましたが、手術を無事に終え、その 3 日後から早速、体操競技部の仲間に頼んでトレーニング器具を病室に持ち込み、毎日 6,7 時間かけて、ひたすら上半身を鍛えました。

左脚はギプスで固定され、天井から吊されたままでしたが、誰になんと言われようと、体操競技を続け、オリンピックの表彰台に必ず立つのだという夢を描いていたからこそ、必死で取り組みました。

およそ 3 ヶ月に及ぶ入院期間中のトレーニングで、退院時には、それまでのシャツが着られなくなるほど、細かった腕が、太く力強くなり、上半身の筋力が確実に付いていることを実感できました。しかし、その後も相次いで悪夢がわたしを襲います。大怪我から 1 年後、今度は右アキレス腱を断裂、さらには、1980 年の第 22 回モスクワオリンピックに、日本が不参加を表明し、初めて代表選手に選ばれていたわたしのオリンピック出場は幻と消えたのです。

わたしは、こうした辛い経験から、苦しい場面に遭遇すると、いつも次のように考えてきました。「ピンチのときこそ、どこかにチャンスの芽がある。何ごとも継続していけば、それはやがて必ず力になり、本気になって真剣に取り組めば、きつとなにかが変わる。」と。

わたしにとって、オリンピックがはっきりとその視野に入ってきたそのときに余儀なくされた大きな怪我とボイコットは、まさにピンチをチャンスに換えることのできた、かけがえのない貴重な体験であり、必要な時間だったのです。

その後再び、1984 年のロサンゼルスオリンピック代表に選ばれ、表彰台で、君が代を聴くことができたのも、こうした厳しい状況に目を逸らさず、真正面からその壁と対峙し、必ず乗り越えてみせると決意したわたしが、そこにいたからだと確信しています。

皆さんも、これまでを振り返り、全てがここまで順調だったと言い切れる人は、多くないはずで
す。たくさんの悔しいことや恥ずかしい思い、大きな山や幾多の谷を乗り越えての現在です。学業
や対人関係、就職活動の不安、競技成績の不振など、それなりに辛いことを経験してきたことで
しょう。目の前に大きく立ちはだかる強固な壁をいくつも打ち破り、いまここに立っています。

本学の 4 年間で、オリンピックをはじめとする世界選手権やユニバーシアードなどの世界の檜
舞台に立つことができたアスリート、インカレ優勝、あるいは日本一を勝ち取ったチーム、さら
には、プロチームとして初めてのトップリーグで果敢に闘ったクラブ、そしてそんな選手たちを陰で支
えてきたサポートスタッフなど、それぞれにしかなし得ない役割を皆さんはしっかりと担ってきま
した。世田谷、健志台両キャンパスの体育館、グラウンド、部室には、それぞれ皆さんの汗と涙が、努
力の結晶としてしっかりと刻み込まれているはずです。

また、クラブ活動だけにとどまらず、自らの夢と理想を実現すべく、積極的に日体大以外の世
界に眼を向け、国際交流を通じて、異文化や多様な価値観に出会い、自身の存在を改めて見
つめ直す機会を得た者、ボランティア活動やインターンシップに参加し、自らの言葉でその想いを
一生懸命に伝え、憧れの仕事を手にした仲間がここにいます。

いずれも皆、自信に満ち溢れ、背筋をぴんと張り、清々しいその表情は、わたしの眼にいま、頼
もしく映っています。皆さん、本当によく頑張りました。

皆さんが学んだ日本体育大学は、1891 年に設立された体育会を母体とし、この時、創設者で
あった日高藤吉郎が掲げた、『體育富強之基』(「体育は富国強兵の基本である」)を建学の精神
としています。やがて、1949 年の日本体育大学体育学部設置に際し、国際平和の実現に寄与
する国づくりを念頭に、その精神は、「体育は肉体をより強靱に、そして豊かにする基礎である」と
解されるようになります。

さらにその後、本学が創設以来、一貫して、全ての人びとの願いである“心身の健康”を育み、
あわせて世界レベルの優秀な競技者・指導者の育成を追求し続けてきたことに鑑み、今日その
建学の精神は、「真に豊かで持続可能な社会の実現には、心身ともに健康で、体育スポーツの
普及・発展を積極的に推進する人材の養成が不可欠である」との現代的な解釈が加えられてい
ます。

このように本学が掲げる基本理念を、卒業に際し、是非皆さんに、もう一度しっかりと噛みしめ
て戴きたいと思います。そして、これまで 4 年間で専門分野を中心に得た技術や知識、学問の作
法や流儀を、「体育・身体活動・スポーツを通じた健康で豊かな社会・人づくりの実現」のために
活かしてください。

旅立ちにあたり、皆さんがこれまで歩んできた道程を辿り、来るべき明日の扉を力強く開いても
らいたいと思います。そして、世界のあらゆる場所でこれから燦然と輝いてください。卒業生ひとり
ひとりの解き放つ光こそが、日体大をこれからも眩しく照らし続けてくれるのです。皆さんのますま
すの飛躍を大いに期待するとともに、本日の門出に際し、重ねてお祝いを申し上げます。

平成 31 年 3 月 15 日
日本体育大学
学長 具志堅 幸司